

『子どもは人類の父である』
ベビーカーに罵声を浴びせる社会

ジャーナリスト

三木寛郎

子どもは人類の父である

『子どもは人類の父である』

1967年に結成され、ホーンセクションを擁するロックグループとして、同時期にデビューした、シカゴとともにブラスロックと呼ばれるジャンルを創り出し、後のフュージョンにつながる道を拓いたとされる、ブラッド・スエット&ティアーズ(Blood, Sweat & Tears)が1968年にリリースしたデビューアルバムの日本語タイトルである。このフレーズは、アルバム・ジャケットにはすべて大文字でCHILD IS FATHER OF THE TOTHER MANと記されていた。さらにその3年後、1971年にビーチボーイズがリリースしたアルバム『サーフ・スアップ』(Surf's Up)に収録された同名曲には、A Child

is the father of the man という歌詞が登場する。

どちらも、おそらくは英国を代表するロマン派詩人であるウィリアム・ワーズワースが1802年に発表した有名な詩、My Heart Leaps Up (別名 The Rainbow)と題された詩からの引用であろうことは間違いないだろう。

ただし、ワーズワースの詩篇に記されているのは、THE CHILD is father of the MAN という表記で、父を指す、father はすべて小文字である。大文字で記された場合、父なる神を意味する場合もあるというが、ワーズワースが意図したのはもともと人間臭い、father であろう。

家元のワーズワースも、シカゴ

も、ビーチボーイズも、子どもというの未来を託す存在であり、いわば、世の宝であるという意味合いと考えられる。

多くの世論は寛容なのだ

少し古い資料だが、2013年の国土交通省の公共交通機関等におけるベビーカー利用に関する協議会によるアンケート調査によると、「我が国(東京)の公共交通ベビーカー利用に対する意識の特徴として、

○混雑時に公共交通に「ベビーカーを折りたたまずに乗車する」ことを不快・迷惑と感じる人の割合が高い。

○ベビーカーで移動する際に公共交通を利用する頻度が高いが、混雑時間帯を避ける割合が高く、公共交通車内でベビーカーを折りたたむ割合も比較的高い。

○ベビーカーで公共交通利用時に公共交通利用時に周囲の乗客による助

けが少ない。
が挙げられている。

ちなみに2016年の内閣府による調査によれば、回答者の8割以上が、電車などで原則としてベビーカーを折りたたまずに使用できることを「賛成」と答え、7割近くが、ベビーカー使用者の周囲に対する気遣いを感じているという。

さらに「ベビーカーマークに関する世論調査」を見ると、ベビーカーマークを見た・知っていた人は回答者の52・6%、見たことがあり内容まで知っている人は24・9%。見た・知っていた人にどこで知ったかを聞くと、「電車やバスなどの公共交通機関」47・7%、「公共施設や行政機関」32・4%、「テレビ、ラジオ」31・7%などとなっている



ベビーカーマーク

る。

一方、周囲の目として、ベビーカー使用者は通行者の妨げにならないようにするなど、周囲に気遣いをしていと思うかを質問した結果、「そう思う」31・8%、「どちらかといえばそう思う」37・9%と、7割近くの人がベビーカー使用者は周囲に「気遣いをしていると思う」と回答している。

電車やバス、エレベーターなどで、原則としてベビーカーを折りたたまずに使用できることについて尋ねると、「賛成」「どちらかといえば賛成」が併せて84・5%にのぼっている。「反対」は10・6%と少数なのだ。

電車やバスなどでベビーカーを利用しやすい環境を整備するために重要だと思う施策を質問（選択肢の中から）すると、「公共施設や公共交通機関におけるベビーカー優先スペースの設置」が55・3%と最も多かった。このほか「ベビーカーマークの掲出場所の拡大」が47・7%、「各種広報媒体を通じた周知活動の実施」「駆け込み乗車などの使用者の危険行為に対する規制」が各36・8%となっている。

昨今のベビーカーへの不寛容

多くの世論はベビーカーに寛容なように思えるが、別の調査によれば、東京のベビーカーに対する意識の特徴として、ベビーカーを折りたたまずに乗車する人を不快・迷惑と感じる人の割合が高く、周囲の乗客による助けが少ないうことが挙げられるという。

コロナ禍にもかかわらず公共交通機関は、通勤・通学・帰宅時間は混み合う。公共交通網にとっては、確かに多くの利用者を寿司詰め状態にできるこの時間帯は稼ぎ時でもあるのだ。この中にスペースをとる、しかも泣く子どもを乗せたベビーカーは嫌がられる。しかし、女性の社会進出や男性の育児参加が進む中、通勤時間帯におけるベビーカーの乗車は増える傾向にあることは確かである。

欧州では、多くの場合ベビーカーを折りたたまずに電車やバスに乗り込むことが可能であり、さらに躊躇なく手を差し伸べる周囲の乗客の存在やその微笑ましい光景を目にすることが多い。

いづぞや車椅子を利用する方にお話を伺った際に、ロンドンなどの地下

鉄は施設が古く、首都圏のようにエレベーター等の整備が進んでいないが、全く困ったことがないという話を聞いたことがある。たちまち周囲の人が手を差し伸べ、急な階段や段差も大きな障害にならないのだという。

確かに忙しい日常の、しかもあわただしい通勤時間帯かもしれないが、それにしてもいまだにベビーカーを押す人に不寛容な視線は後を絶たないように思えてならない。

人間の優しさを取り戻せば

1998年に千葉県内で実施された調査によると、当時の千葉県内の鉄道各社（JR、京成、新京成、東武、営団地下鉄、東葉高速、北総開発）のうち、ベビーカーの使用を認めていたのは、なんと「JRと北総開発」だけだったという。その理由は、「車輪がしっかりと固定されず、電車内で動きだす恐れがあるなどベビーカーの安全性に問題がある」「客から迷惑だと苦情を受けている」というものだったという。

世論の声に押される形で、国土交通省は2014年に「ベビーカーを畳んで乗るのは危険と判断し、電車

やバスの車内ではベビーカーを畳まなくてもよい」とする方針を提示した。

それでも、ラッシュ時に子連れで電車に乗った女性が、車内でスーツ姿の男性に「この時間にベビーカーで乗るな」と罵声を浴びせられたなどというネット上の書き込みが話題になる事態が発生している。

冒頭の『子どもは人類の父である』ではないが、赤ん坊を連れた女性に罵声を浴びせたスーツ姿の男性も、かつては乳母車の中で泣き叫んでいた赤ん坊であったのだ。

ふと思いつくのだが、かつてはバスや電車の車内で、荷物を抱えて立っている人の荷物を座っている人が持つような光景は珍しいものではなかった。席を譲った学生の重そうな鞆を膝に乗せる老人の姿も記憶にある。それが日常の風景であったのだ。昔はよかつたと懐古的になる気はない。もつと前向きに、新しい社会のあるべき姿として、ベビーカーのみならず、車椅子等に関しても寛容な社会が生み出せないものだろうか。

人に優しい社会なら、きつと戦争も起こらないはずである。